

長崎県対馬市における渡来経典調査

川口 成人

1. 調査の経緯と概要

長崎県対馬市は、日本国内有数の渡来経典（中国・高麗版）の所在地である。これらの経典は、日本と中国・朝鮮の文化的交流を示す文物であるとともに、すでに中国・韓国では失われたものも含まれ、東アジア宗教史のなかで貴重かつ重要な宗教遺産であるといえる。しかし、従来は所在確認と概要調査のみにとどまっており、十分な評価がなされないまま、資料保全上にも問題を抱えている状況にあった。事実、近年では島内所在の渡来経典を含む朝鮮半島由来の文化財の盗難が相次いでいる。このような管理状況を改善し、適切な保存措置を講じるためにも、島内に所在する渡来経典の学術的調査が求められている。

こうした状況を踏まえ、2013年度から2014年度にかけて、科学研究費補助金（研究活動スタート支援）「対馬に所在する中国・朝鮮伝来経典の基礎的研究」（研究代表者：横内裕人）による渡来経典調査を実施した。主な調査対象は、対馬市厳原町豆殿の多久頭魂神社（写真1）に所蔵される高麗版大蔵経である。本蔵は、現在長崎県立対馬市歴史民俗博物館に寄託されている。高麗再雕版大蔵経と呼ばれる一切経で、大般若経をほとんど欠き、近年には1冊が盗難被害に遭っているものの、冊子本1187冊のうち、1012冊が遺存している。完存に近い再雕版が残るものとして、国内外において貴重な事例である。

2013～2014年度の調査で、全巻の調査が終了し、一卷ごとの詳細な書誌情報を入力した目録の作成が完了した。しかし、印出・請来時期を示す識語・墨書は見いだせず、印出・請来時期の確定には至らなかった。また、2014年度の調査終了直前に、和版の大般若経をはじめ、新出の断簡が多数発見されたため、継続調査が必要となった。

これを受けて、2016年度より、科学研究費補助金（基盤研究（B））「対馬に所在する中国・朝鮮伝来経典の総合的研究」（研究代表者：横内裕人）を得て、4年間の調査を開始した。以下では、2016年度に実施した経典調査について述べる。なお、調査日程および調査参加者は下記の通りである。

調査日程：2016年6月13日～17日、9月12日～16日、11月10日、2017年1月20日～27日

調査参加者：横内裕人（京都府立大学）、須田牧子・谷昭佳・高山さやか（東京大学史（総勢、敬称略）料編纂所）、馬場久幸（佛教大学）、杉山豊（京都産業大学）、富田正弘（富山大学）、池田寿・藤田勲夫・梅澤亜希子（文化庁）、山口華代（長崎県教育庁学芸文化課）、荒木和憲（国立歴史民俗博物館）、一瀬智・松浦晃祐（九

州国立博物館)、宇佐美倫太郎・鍛冶利雄・泰地翔大・川口成人・朱文彦・三輪眞嗣(京都府立大学大学院博士後期課程、川口・朱は本科研のリサーチ・アシスタントとして参加した)

2. 経典調査

今年度の経典調査では、多久頭魂神社所蔵の和版大般若経の調査・調書作成を実施した(写真2)。調査では、巻第一の巻首に「平朝臣宗刑部少輔貞盛(花押)ノ子息成職(花押)」という識語が確認された。宗貞盛は享徳元年(1452)に没した対馬宗氏の当主で、成職はその子息である。成職の「成」は室町幕府8代将軍足利義成(後に義政に改名)からの偏諱と考えられる。義成は文安3年(1446)～享徳2年(1453)までの名前なので、成職はその期間に偏諱を受けたことがわかる。貞盛の没年と合わせて、この大般若経の寄進時期を、文安3年～享徳元年のあいだに絞ることができる。

一方、多久頭魂神社所蔵高麗版大蔵経についても、版面、料紙を中心に継続して調査を実施した。

2017年1月21日には、これまでの調査成果を確認する研究会を実施した。まだ未確定な点が多いものの、多久頭魂神社所蔵高麗版大蔵経は15世紀中頃に印出され、15世紀後半に宗氏の招請によって対馬に渡来した可能性が高いことが指摘された。

多久頭魂神社所蔵の経典の寄託先である対馬市歴史民俗博物館は2017年4月1日に休館し、2020年に新施設である対馬博物館(対馬市立)、対馬歴史研究センター(長崎県立)が開館することが公表されている。今後は、対馬に所在する他の渡来経典を中心に、関係諸機関と連携しつつ調査をおこなっていく予定である。



写真1 多久魂神社拜殿



写真2 経典調査の様子